

さけます・内水面水産試験場としての出発

河村 博

北海道立水産孵化場は、平成 22 年 4 月 1 日から地方独立行政法人北海道立総合研究機構のさけます・内水面水産試験場になります。

水産孵化場の前身は、北海道庁の初代水産課長を務めた伊藤一隆氏が、明治 21 (1988) 年に石狩川水系千歳川に建設した千歳中央孵化場に始まります。その後組織名称で変遷を重ねましたが、太平洋戦争終結後の昭和 27 (1952) 年に、現在の北海道立水産孵化場が札幌中の島に設置されました。当時は、調査研究の水質分野や湖沼調査等で成果をあげ、他方事業ではニジマスの種卵生産およびサケ・マスの捕獲、密漁監視等の業務に携わってきました。昭和 32 (1957) 年に道南の森町に森支場を整備した後、増毛支場に続き、えりも支場、宗谷支場、真狩支場、そして昭和 58 年に熊石支場を整備して、サケ・マスの不振地域であった日本海およびえりも以西太平洋でさけます増殖事業を展開するとともに、池産サクラマスの種卵生産事業を森支場と熊石支場で継続してきたところです。

この間、水産孵化場ではサクラマスの増殖に関する調査研究に取り組む一方で、バイオテクノロジー技術の開発や魚病防疫に関する研究、湖沼のワカサギ、ヒメマスおよび河川のシシャモ、カワヤツメ等の増殖研究を進展させることができました。昭和 60 年には水産孵化場本場が、札幌市中の島から現在の恵庭市北柏木町に移転されました。これにより、水産孵化場は試験研究施設が整備拡充されて、高度な技術開発研究に取り組むことができるようになりました。

一方、サケの来遊数が 1000 万尾を超えた昭和 50 年前後より、国(水産庁)が一元管理してきた、さけます増殖事業に民間の力を導入する考えが強まってきました。受益者負担の考え方です。この流れは、国の行財政改革の流れと密接に関連しつつ、平成 11 (1999) 年に国はさけます増殖事業から撤退し系群保全のための種苗放流に変わったことから、北海道系さけますの資源管理と増殖管理は、北海道庁に移管されることになりました。水産孵化場はそれまでの 6 支場体制を見直し、平

成 16 年に道東地区に道東支場を整備し、現在の 3 支場体制(道北支場、道南支場)を整えたところです。このとき部内室として、内水面水産業が盛んな道東地区の網走市に道東内水面室が置かれました。そしてこのたび、道立試験研究機関の見直しにより、22 道立試験研究機関を総合的・分野横断的に集約した、地方独立行政法人北海道立総合研究機構が、平成 22 年 4 月から発足する運びとなりました。

北海道立総合研究機構では、22 道立試験研究機関が分野別に 6 つのグループに分けられ、それぞれが有機的に連携して研究技術開発、技術指導、普及活動に取り組むこととなります。水産孵化場は、海面の 6 水産試験場とともに水産研究本部に含まれます。そして、その名称も水産孵化場から、「さけます・内水面水産試験場」へと変わります。明治 21 年に千歳中央孵化場として発足した水産孵化場は、これで孵化場(ふかじょう)の看板を下ろすことになりました。これまで各支場の現場で、さけます捕獲採卵・ふ化放流に誠実に取り組んでこられた先輩諸兄、ならびに関係する方々にとっては、寂しく残念な感慨が去来すると想像されますが、孵化場の技術・研究者があらためて名実ともに試験場の研究者として活躍する場と時代が与えられたことに対しまして、ご理解とこれまでと変わらないご協力をお願いするところです。

さて、新しく発足する「さけます・内水面水産試験場(さけます内水試)」は、その組織機構およびその業務に、大きな変更はございません。ただし、本場の研究部が 3 部体制から 2 部体制に整理統合されること、科制からグループ制になること、研究予算が全額道費から道の交付金と外部資金に変わることで、法人職員が非公務員化されることが、これまでと変わります。さけます・内水面水産試験場が目指すゴールは、さけます漁業および内水面水産業の振興を通じた北海道民の生活の質の向上にあります。北海道立総合研究機構では、ゴールに向けた道筋がより効率的で、より成果の出口が見えやすいことが求められることとなります。そのために場員が共通の課題意識を持ち、真摯な

議論および異分野からの意見を取り入れる柔軟な発想をとおして、研究の推進と普及意識の強化を図り、試験研究成果を産業現場に利活用させていきたいと考えているところです。北海道立総合研究機構は全国に類が無い、異分野の試験研究機関が分野横断的に統合して出来上がった研究機構です。異分野の知見を柔軟に結集して、北海道に新しい産業分野を発展させ既存の産業分野の振興に向けて、さけます・内水面水産試験場として充分貢献できると期待しているところです。

ここで、さけます・内水面水産試験場が取り組む試験研究課題のいくつかをご紹介します。北海道の秋サケは変動が見られるものの5000万尾前後の高い資源水準を維持していますが、これを支える増殖管理に必要な親魚を確保するため、資源予測とその技術改良が当場に求められています。また野生資源の評価に関する試験研究が、サケおよびカラフトマスで始まりました。そしてサクラマスでは河川環境の修復と保全に関する研究課題がますます重要になってきたところです。一方、地域の特産種である内水面漁業のワカサギ、シラウオ、ヤマトシジミ、カワヤツメ、ヒメマスなどは、持続的な漁業管理と増殖技術の開発に取り組んでいます。内水面の遊漁(釣り)に関する研究課題も必要になってきました。希少種のイトウおよびブラックバス、ブルーギルなどの外来種の対策技術の開発研究は喫緊の課題であり、内水面養殖業では安全で安心な道産素材を利用した養殖技術開発に取り組んでいます。そして、これらの水産業を支える魚病の防疫と対策に関する研究も重要な課題のひとつです。さらに、内水面環境と生物多様性の維持のため、海の栄養を、川を通じて山に運ぶサケ・マスの役割を、物質循環として研究する課題にも取り組んでいるところです。

ところで、水産業は、研究対象種が水の中の生き物であることから、人が直接数えたり、手にとって常時観察することが難しい研究分野です。さらに対象種は、時々刻々と変化する環境、たとえば海洋・汽水環境や河川・湖沼環境の影響を受けながら、持続的に再生産を行っています。従って環境の変化と資源の変化を、科学的に継続的に追跡しデータを蓄積しておかなければ、異変が起きたときの原因解明やこれからのことを予測するときに、私たちは信頼性の高い試験結果を提供することができません。これらモニタリング調査は、技術開発研究などに比べてなかなか成果を出しに

くい研究分野であり、北海道立総合研究機構のなかでは、いわゆる評価の出し難い研究課題と考えられますが、モニタリング調査は、さけます・内水面水産試験場にとって欠かすことができない基礎調査であり、今後も継続していかなければならないと考えているところです。

最後になりますが、さけます・内水面水産試験場は、道内の関係する諸団体および諸研究機関と、これまでどおり連携を深めてまいります。また、北海道庁の関係部署および他の部署とも効果的な施策の実施のために連携してまいります。そして道民のみなさんにも、私たちの研究・技術指導・普及業務の成果や内容について周知していかなければなりません。この広報誌である「魚と水」もこれまでどおりホームページで公開するとともに、現地報告会や研修会そしてシンポジウム等を通じて広報に勤めてまいります。

これまで水産孵化場を育て、支え、励ましてくださった先輩諸兄そして関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、さけます・内水面水産試験場の発展のために、これまでと変わらないご理解とご協力をたまわるとお願い申し上げます。

(かわむら ひろし：場長)